解答範囲は、解答番号 1 から 28 までです。

〔一〕 左の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、原文を改変した箇所があります。

もともと「自己家畜化」という概念は、一九世紀末にドイツの学者たちが言い出したものらしい。それも初めは、身体形質の特徴だけに注目が寄せられた。つまり動物の場合、野生の原種にはない特徴が家畜には多くみられる。青色の虹彩、捲き毛や縮れ毛、椎骨数や四肢骨の変異、皮膚や体毛の色を決める色素の増減などなどだ。そしてこれらは家畜のみならず、ヒトにもやはり顕著にみられる特徴なのである。これに気づいたハーン、フィッシャー、ヴァイデンライヒ、そして何よりアイクシュテットが、人間はみずからを家畜化してきた、と主張した。

(中略)

こうした、本来は生物学的な領域で語られていた自己家畜化論を人間の社会面にも適用したのが、「人間・動物学者」を名のった小原秀雄である。それによれば、ヒトとは自分のハビタット(くらし場所)をみずから構築・改変し、そうして作った人工的な環境中でくらす動物である。そこが他の動物とは大きく異なる点であり、その意味でセルフ・ハビタットメーカー、つまり生息地自己設定者と呼ぶことができる。そうした過程はすでに狩猟採集時代、火の使用を開始し、罠などの道具を発明したころから始まっていた。しかし本格的に進行したのは、作物や家畜の出現からである、と小原は見る。それは本質上、自然に働きかけ、食物を生産する生活である。ここで人為化された生態系が本格的に出現した。ヒトによる人工的な食物連鎖の出現だ。小原は言う、

家畜を飼い、作物を作ることはすべてによいことばかりではなかった。自分で自らを含める食物連鎖をつくり、結局は自ら人為的生態系を再構成した。そのことは自然界にあるものを組みかえはじめたことであって、その後分配と利用再構成の能力が高まってくると、地域によっては自然をほとんど全部破壊して人工の「自然」に再構成し――典型的に都市の形成に見られる――、その中に自分たちのすべてを組みいれるということになる。自己飼育・自己家畜化であり、したがって自分たちの飼い方(?)を社会的にきめていかなければならない。

その行く先は都市化である。人間の生活環境に多様で大量の人工物質が入りこんでくることだ。つまり自然物を素材としながらも、いっそうの人為化・人工化が進み、それが居住する場所その他の生活場所はもとより、全自然ひいては地球全体に及んでいく過程である。こうして自ら作った人工環境のなかで生きるヒトは、他の野生動物と直接的にはほとんど対峙せずに過ごすことになった点で、飼育動物に似ている。すなわち自己家畜化である。

人類圏が都市化され、管理がゆきとどいてくるにつれて、繁殖も産院やヒニンなどで管理されて、ヒトは、こうした視点に立てば、完全に飼育され管理された家畜動物に似てきた。「檻」の中とまではいえないにしても、人造物の世界の中で一生を終えるからである。コウソクされたり、限られたスペースや空間にくらし、ときにはむしろ好まないのに満員電車にゆられる。

(中略)

こうした人工環境の中で、人が苦痛を避け、安楽や安心をもとめてゆく現代文明を哲学の森岡正博は、自己家畜化概念にもふれつつ「無痛文明」とよび、人類遺伝学の尾本恵市も一貫して、自己家畜化のすすんだ現代に A を表明してきた。一九九〇年代から日本で口にされるようになった「社畜」という語は、そうした B な現実認識のあらわれではなかったか。

(中略) 英語圏でもこのところ、自己家畜化を生物面のみならず、社会や文化の面にも拡張するうごきが出てきた。たとえばハーバード大の人類学者ジョセフ・ヘンリックは『文化がヒトを進化させた』において、こう述べる。文化進化によって生まれた自己家畜化のプロセスが、ヒトの遺伝的な変化を促した結果、私たちは向社会的かつ従順で、規範をジュンシュする動物になった。共同体に監視されながら社会規範に従って生きることを、当然のことと受け入れるようになったのである。(中略)

サイエンス・ライターのリチャード・フランシスも似た論調である。『家畜化という進化』で「人類は自己家畜化したのか?」と問いかけ、身体だけでなく社会・文化の変化もこの概念で説明できる、と主張する。とくに情動面において、仲間の人間がそばにいるときに感じる恐怖や攻撃性がヒトの場合は低下している。つまり従順性が高まっていることが、我々の協力的相互作用の基礎となっているのである。(中略)

しかし私の見るところ、今後もっとも影響力をもちそうなのは、イェール大学の人類学者ジェームズ・スコットが著した『反穀物の人類史』だろう。彼もまた、定住生活の方が移動生活よりすぐれた魅力的なくらし方だ、という前提を疑問視するところから始める。 X 植物の作物化や動物の家畜化によって飼い馴らされたのは、 Y ホモ・サピエンスの方ではないのか、と問う。 Z 肯定的に答えたい彼は、狩猟採集民の生活世界と比較すると、主要穀物というメトロノームに縛りつけられた農耕民の生活世界の方が、経験の幅がはるかに狭く、文化的にずっと貧しい、と言うのである。

理由は何であれ、飼い馴らされた穀物と動物への依存度が高くなったことは、景観修正の量的変化を表している。栽培作物は形質転換された。家畜も形質転換された。それが依存しているドジョウや飼い葉も形質転換された。そして、とりわけホモ・サピエンスが形質転換された。

そうして人獣ともに変化した形質のうち、スコットが重視する一つは外的刺激に対する恐怖・逃走反応の弱化である。感情的な反応能力が全般的に落ち、鈍化することは、混雑したドムス(住居環境)で人間に監督されて生きていくための条件のひとつだった。ただ人間の場合も同じことが起きているかについては、留保が示されている。

スコットのあげるもう一点は、さらに重要である。それは、家畜動物が一般に生殖年齢に達するのが早く、排卵と妊娠の回数も多いうえ、生殖寿命も長い点だ。人間も同様である。狩猟採集民と比べると定住農民の方が繁殖率が高いのだ。それには理由がある。非定住民は、たいてい意図的に繁殖を制限してきた。移動生活にとって子どもを抱えて運ぶのは負担だからである。そのため、離乳を遅らせる、堕胎薬を使う、育児放棄する、子殺しするなどして出産間隔をあける方策がとられてきた。また激しい運動とタンパク質豊富な赤身肉の食餌という組合せにより、思春期の訪れも遅れ、排卵も不定期になり、閉経も早まった。ところが定住農民の場合には出産間隔をせばめ、農作業の労働力としての子どもを産むことの方にメリットが生ずる。初潮も早まり、穀物食では離乳して軟食になるのも早期化し、排卵が促進されて女性の生殖寿命も延びた。

おそらく農耕社会に起きた人口の増加と、それによる圧力があいまって、世界のさまざまな語族の拡散につながったのだろう。おおきく見て、農耕文化と主要語族の拡散がリンクしていた、という考古学者ベルウッドらの説は非常に魅力的だし、今みてきたスコットの議論とも整合的である。

注目すべきことに、人類史上には農耕という生活様式をあえて受け入れないか、あるいは進んで放棄した人々もいた。東南アジアやオセアニアをはじめアフリカやアメリカ大陸でも、もともと農耕を行なっていたものの、農耕が不可能な環境や、きわめて周縁的な地域において狩猟採集民に転じた例が知られている。また地中海地域の初期国家においてさえ、その臣民が税や徴兵や伝染病や抑圧から逃れるために農業からも、都市の中心地からも離れることが珍しくなかった。こうした現象は時に、文化的〈退行〉と呼ばれることもある。けれど、むしろ生態ニッチに合った生業に特化するという、合理的な棲み分け行動とも見ることができよう。

(山田仁史『人類精神史』による)

(注) ○形質=生物の持つ性質や特徴。 ○原種=家畜種や栽培種の元となった、野生の種。 ○虹彩=角膜と水晶体の間にある薄い膜。 ○椎骨=背骨を構成する個々の骨。 ○ハーン=エドゥアルト・ハーン。ドイツの歴史学者。

一八五六～一九二八。　○フィッシャー＝オイゲン・フィッシャー。ドイツの人類学者。一八七四～一九六七。
○ヴァイデンライヒ＝フランツ・ヴァイデンライヒ。ドイツの解剖学者、自然人類学者。一八七三～一九四八。
○アイクシュテット＝エーゴン・アイクシュテット。ドイツの人類学者。一八九二～一九六五。　○社畜＝勤務している会社から過度な労働を強いられているにも関わらず、それに抵抗せず指示された通りに働く会社員を揶揄する言葉。　○向社会的＝他の個人や集団の利益となる行動を、自主的にとるさま。　○景観修正＝『反穀物の人類史』で用いられる用語で、人類が世界の環境を再構築すること。　○形質転換＝外部由来のDNAを遺伝情報として組み込んだことによって、生物の外形や行動が変化すること。　○語族＝同じ一つの言語から枝分かれして生じたと考えられる言語のグループ。　○生態ニッチ＝ある生物の生息場所、またはある生物が生態系において担っている役割。

問一　傍線部(ア)～(エ)にあたる漢字を、次の各群のうちから一つずつ選びなさい。

解答番号 1 ～ 4

(ア) ヒニン　1
① 避　② 被　③ 否　④ 非

(イ) コウソク　2
① 鋼　② 抗　③ 梗　④ 拘

(ウ) ジュンシュ　3
① 遵　② 巡　③ 殉　④ 準

(エ) ドジョウ　4
① 状　② 場　③ 浄　④ 壌

問二　傍線部①「セルフ・ハビタットメーカー」とありますが、セルフ・ハビタットメーカーだけが行う固有の行動の例として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 5

① 新しく訪れた土地で、自分にとって住みやすい場所を見つける。
② 住処(すみか)の近くに植物の種を播(ま)き、適切な時期に収穫して食べる。
③ 獲物の豊富な地域を新たに探し出し、そこで狩りをする。
④ 病気になったとき、野草の中から症状を改善するものを見つける。

問三　傍線部②「自分たちの飼い方(?)を社会的にきめていかなければならない」とありますが、その説明として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 6

① 人工的に作られた食物連鎖においては、農村地域に住む大多数の人間が生産する家畜や農作物の生産量を、都市に住む消費者である一部の人間が決定する。
② 自然を再構築することによって生まれた巨大で複雑な都市の中において、どのような方法で社会に貢献するかは、個々人が自己の判断のもとに決定しなければならない。
③ 人為的な生態系の中では、人間が家畜や作物だけでなく自らのあり方をも社会全体の中で規定し、行動に対して一定の制限を設けなければならない。
④ 自然を破壊して形成した人為的生態系においては、多岐にわたる家畜の飼育や農耕に必要な労働の分担を、構成員全体の合議で決定しなければならない。

問四　空欄 A と B を補うのに最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。

解答番号 7

① A 危機感　B 自嘲的
② A 閉塞感　B 虚無的
③ A 疎外感　B 感傷的
④ A 焦燥感　B 皮相的

問五　傍線部③「自己家畜化を生物面のみならず、社会や文化の面にも拡張する」とありますが、その説明として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 8

① 多くの時間を共有する家畜から人間が受けた影響として、皮膚や体毛の色などといった外見的な特徴だけを考えるのではなく、社会に従順で規範を重視する文化も含めて考える。
② 家畜と人間の共通点として、自然と乖離(かいり)した人為的な環境で暮らすという生活面だけに注目するのではなく、同じ種に対する攻撃性の低下など情動面に関する共通点にも注目する。
③ 都市生活が人間に及ぼした影響の範囲を、身体の形質や情緒面の性質といった遺伝的特徴だけではなく、規範を守りお互いに協力し合う等の文化にまで広げて捉える。
④ 人工的な環境が原因で人間に生じた変化として、青い虹彩や縮れ毛などといった身体面の特徴だけではなく、従順性の高まりなど社会のあり方に関わる情動面の特徴まで含めて考察する。

問六　空欄 X ～ Z を補うのに最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。

解答番号 9

① X 次に　Y かえって　Z にもかかわらず
② X つまり　Y とりわけ　Z どうしても
③ X そして　Y むしろ　Z もちろん
④ X しかし　Y まさしく　Z そうして

問七　傍線部④「狩猟採集民と比べると定住農民の方が繁殖率が高い」とありますが、その理由として明らかにふさわしくないものを一つ選びなさい。

解答番号 10

① 定住農民は狩猟採集民と比べ、育児放棄や子殺しといった、繁殖を制限する方策をとることが少ないから。
② 定住農民は狩猟採集民に比べて労働時間が短く、育児のために使うことのできる時間が比較的長いから。
③ 定住農民は狩猟採集民と異なり移動しないので、子どもが邪魔にならず、むしろ労働力として活用できるから。
④ 定住農民の女性は狩猟採集民に比べて初潮が早く、排卵が安定しており、生殖寿命が長いから。

問八　傍線部⑤「こうした現象は時に、文化的〈退行〉と呼ばれることもある」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最も適切なものを一つ選びなさい。

解答番号 11

① 人間はこれまで、自らの生活様式を変化させることで多様な環境に適応してきたが、その努力を放棄して狩猟採集生活に戻ることは本来のあり方に反するから。
② 移動生活によって様々な文化の担い手が接触し相互に影響し合う中で文化は発展するが、定住生活では文化が固着化し、むしろ後退することさえあるから。
③ 狩猟生活から農耕生活や都市生活へと推移していくのが人間の発展の方向であり、狩猟採集生活に戻ることはその流れに逆行しているから。
④ 文学や芸術などといった文化の発展は、多くの人々が混じり合って暮らす都市でこそ可能であり、小規模な集団に分かれて暮らす狩猟採集生活や農耕生活では難しいから。

問九　この文章の内容に明らかに合致しないものを一つ選びなさい。

解答番号 12

① 青い虹彩や縮れ毛等は、人間と家畜化された動物に共通に見られる身体的特徴であり、十九世紀末に提唱された自己家畜化論の根拠となった。
② 自己家畜化とは、人間が環境を支配し変化させる過程において、自分たち自身の身体や行動も家畜と類似したものに変化したことを意味する。
③ 人間は、人口密度が高い人工的な環境に住み、集団でいることに安心感を覚え、他者からの監督に対する抵抗が少ないなどといった点で、自己家畜化していると言える。
④ 自己家畜化の原因は人間が自身の生活環境を人為的に構築・改変したことにあるが、そのような構築・改変は農耕生活と同時に始まった。

〔二〕　左の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ここで、今日のテーマである「想起（アナムネーシス）」について考えてみたいと思います。このアナムネーシスという言葉にはすこし①特殊な含意があります。ふつうの感覚だと、何かを思い出すというのは、自分が過去に経験したことを思い出すことと同義ですよね。ですが、古代ギリシアの哲学者プラトンがいうアナムネーシスというのは、かならずしも過去に経験したことの想起であるとはかぎりません。プラトンによれば、われわれはこの世界に誕生する以前に天空の世界にいた。そこにはこの現実とは違う理想的な世界、イデアの世界があって、われわれはこのイデアの世界を想起しながら現実を経験している、ということになります。東洋思想ふういうと、前世の記憶のようなものでしょうか。いずれにせよこうした含意があるので、後世の人たちによってアナムネーシスという言葉が用いられるときも、かならずしも自分が覚えていることを思い出す、ということにはかぎりません。たとえば精神分析の文脈であれば、自分が完全に忘却してしまっていることや、意識されざるトラウマとして刻み込まれていることを思い出すという意味で、やはりこの言葉が使われることがあります。

執筆というものを、このアナムネーシス的なものとして考えてみると、どうなるでしょうか。わたしたちは何かを書くときに、具体的なことであれ抽象的なことであれ、基本的にはそこで書かれる事柄を思い出しながら書いている。とくに、自分自身の経験を書くとなれば、その経験を思い出しながら書くというのが基本になるでしょう。ただしそれは、自分の経験があらかじめ存在していて、それを言葉によって二次的に書き起こすということには、おそらくならない。むしろ、わたしたちの過去の経験は、それを思い出したり言葉にしたりするときにはじめて立ち上がるのではないか。もちろんその出来事はまぎれもなく過去に起こったことではあるのですが、その出来事のもつ手触りや印象というのは、それを思い出したときにはじめて構成されるとも思うんですね。

ここで、②想起としての執筆を、次のような三つの水準に切り分けてみます。執筆が何かを思い出すための営為であるとすると、そこでまず区別されるべきレイヤーは①「わたし」の想起、つまりわたしが過去に経験したことを思い出しながら書くということ、②「わたしたち」の想起、つまり――この「わたしたち」という一人称複数の集団をどういうレベルで設定するかということも含めて――ある共同体が過去に直面した災害や戦争、経済的な不況といった集合的なレベルで経験された事柄の想起の区別です。

さらにこれに加えて、③③一誰でもないもの」の想起がある、と言うことができるかもしれません。さきほどの言いかたでいえば、これまで誰も経験していないことを思い出しながら書くこと、つまり、誰か特定の人の記憶に帰属するわけではない事柄について書くことです。そんなことが可能なのかという疑念もあるかと思いますが、いまの話に基づいて、ここからは実践的かつ理論的に考えてみたいと思います。まずは実践的な話をしましょう。

たとえば、みなさんが何らかの文章を書きたいという意欲を抱いたとします。そのさい、みなさんのなかには過去にとや感じたこと、あるいはじかに経験した出来事に関する膨大なアーカイブがあるわけですね。そのなかに、「これは自分が生きているうちに書いておかなければならない」という切実な事柄があるとします。それさえ見つかればあとは簡単です。中井久夫が言うように、それを道案内のように書いていけば、それでひとつの文章になる。さきほども言ったように、事実として自分が考えたことや感じたこと、経験したことを書けば、それだけで文章はできあがるわけです（A）。

これに対して、もうすこし社会的に開かれた文章を書きたいときもあるでしょう。国でも自治体でもいいのですが、自分が帰属する共同体や社会集団にとって忘れがたい出来事、たとえば戦争や大きな自然災害があった場合、そういうものを題材にして、自分ひとりの経験には留まらない集合的な記憶を紡ぐことができれば、それもまたひとつの文章になるはずです（B）。

ポイントは次のCです。いまのAとBはあくまでも、いちおう事実として過去に起こったことを文章にする、という話でした。これに対して、このAとBをあるていどフィクション化すると創作になります。AとBがノンフィクションであるとすると、Cは小説やSFのようなフィクションに相当します。

最近よく思うのが、このA、BとCの隔たりというのは、実はそれほど大きくはないのではないかということです。というか、AやBに相当する事実ベースの文章作法と、Cのような創作技法の垣根を、意識的に下げることもできるのではないか。これこ

そが、さきほど③で「誰でもないものの想起」と言ったものです。［X］を言葉として定着させたとき、うまくいけばそれは「誰も経験したことのない出来事」の想起になる。すぐれた小説や映画がそうであるように、たとえ現実に起こったことではなくとも、フィクションのなかで起こっていることをあたかも自分の問題として読んだり見たりしてしまうような空間がそこに立ち上がる。さきほど言った「誰でもないものの想起」というのは、こういう水準のことを想定していました。

この話を理論的に肉づけしてみましょう。わたしたちは何のために書くのか、それは何よりも「忘れない」ようにするためです。わたしも人生が残り半分くらいになってしまったので、死ぬ前にこれを書いておかなければという切実な感覚を抱くことが増えました。不特定多数の人に読んでもらうための仕事で書く文章だけではなくて、個人的に「これは書き残しておきたい」ということを少しずつ書いています。それはやはり、その出来事を忘れないようにするためです。あるいは、その出来事を忘れたくないというよりも、その出来事がもっていた手触りや感触を忘れたくないという感じでしょうか。

そういう局面においてこそ、①何よりも「書きかた」が重要になります。たとえ自分が忘れたくないことを書けたとしても、それだけで出来事が保存されることにはならない。書きかたが悪ければ、むしろ書いたことによって出来事が失われてしまう可能性すらあるでしょう。そういうことがあるから、古来から文章というものは批判されてきたわけですね。いわゆるエクリチュール批判と呼ばれるものですが、文章というものはそれが書かれて定着してしまったら、誤読されたり歪曲されたりしてしまう可能性を多分に含んでいる。だから、まずい書きかたをすると逆効果になりかねないということは重々意識すべきでしょう。自分がこれを覚えておきたい、これは忘れてはいけないということを書くときにこそ、いかにして書くかが重要になってきます。

そろそろまとめに入りたいと思います。今日の話に関連するテクストとして、石原吉郎という詩人の書いた「シベリア・エッセイ」を用意してきました。これは、シベリアでの強制労働から帰国した詩人が一九七〇年前後に集中的に書いたエッセイです。石原は終戦を大陸で迎えて、その後ソ連のラーゲリで一〇年弱、強制労働に従事しました。石原吉郎は、もちろん詩もすごく良いのですが、むしろこの「シベリア・エッセイ」によって戦後日本の文芸史のなかに不動の地位を確立した人だと言えるでしょう。

これなどはかなり迫力のあるエッセイなのですが、よく考えてみると、これも基本的には、彼がシベリアで経験し、考えたことがただ書かれているだけなんですよね。ですが、これを書いたのが石原吉郎でなければ、その内容が［A］なものになった可能性も大いにあると思います。この「シベリア・エッセイ」という類まれなエッセイが今でも広く読み継がれているのは、書かれている内容それ自体というよりも、書きかたのためだろうと思います。石原吉郎という詩人の硬質な文体こそがこのエッセイの［B］を担保しており、反対にそこに書かれていることは、彼がシベリアで経験した出来事の想起にすぎない――そのように考えてみると、⑤このエッセイの見えかたが大きく変わってくると思います。

最後に、これは自分にとって執筆は彫刻であると言ったことにも繋がってくるのですが、テクストというものを、ひとつのモニュメントであると考えてもよいでしょう。自分が経験したこと、ある社会集団が経験したこと、あるいは誰も経験していないこと、そういったことを、ひとつのモニュメントとして打ち建てる。文章には本当にあらゆる種類のものがあるけれど、そのなかでも歴史的に読みつがれていくテクストというのは、そういうモニュメントとしての性格を帯びたものではないかと思います。そのように考えた場合、それが「何を」表象しているかということに加え、それが「どういう姿で」そこに立っているかを考えることは、やはり重要でしょう。彫刻におけるそうした造形的な要素に対応するのが、文章においては「いかに書くか」ということだと思います。

いま、世の中には膨大な量のテキストが溢れていますよね。書物にかぎらず、ウェブで読める文章やGoogle翻訳を使って読める外国語の文章なども含めたら、人生が何回あっても読みきれない量の文章がある。そのような世界において、あえて何かを書くということになれば、すべてがフローとして流通していく言業のなかに一つの錨をおろす、一つの記念碑を打ち立てるという、そういう動機がなければもはや書けないのではないでしょうか。すくなくともわたしは、⑥現状のフローをただ強化するだけの文章は、もう書きたくない。自分にとって、あるいは他者にとってのモニュメントになりうるような、そういう文章を書きたいと、いつも思いながら書いています。

（星野太「想起としてのライティング」による）

（注）○トラウマ＝精神的外傷。恐怖・ショック・異常経験などにより精神に受けた傷。○レイヤー＝層、階層。○アーカイブ＝保存された記録、資料。○中井久夫＝精神科医、思想家。「わたしの論文作法」というアンケートで、文章を書くことの第一歩は自宅への案内文である、と答えている。一九三四～二〇二二。○エクリチュール＝フランス語で〈書くこと〉〈書かれたもの〉の意味。○石原吉郎＝詩人、随筆家。一九一五～一九七七。○ラーゲリ＝捕虜収容所。特に、第二次世界大戦後のソ連の捕虜・抑留者収容所を言う。○モニュメント＝記念碑。不朽の業績。○フロー＝流れ、流動。

問一　傍線部①「特殊な含意」を説明したものとして、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 13

① 想起（アナムネーシス）という言葉には、個人が経験したことよりも、集合的なレベルで経験された事柄を思い出すという意味が込められている。

② 想起（アナムネーシス）という言葉には、過去に起こった出来事のみに限らず、その出来事のもつ手触りや印象を思い出すという意味が込められている。

③ 想起（アナムネーシス）という言葉には、個人が記憶していることよりも、忘却してしまったことや押し隠していることを思い出すという意味が込められている。

④ 想起（アナムネーシス）という言葉には、個人が経験したものに限らず、種々の観念や無意識の領域をも含めて思い出すという意味が込められている。

問二　傍線部②「想起としての執筆」を説明したものとして、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 14

① 書かれるべき出来事は、自分が経験した具体的なことであれば、ありのままに書くことができるが、抽象的なことであれば、想起しながら書くしかないということ。

② 書かれるべき出来事は、いきなり言葉によって書き起こすことは困難なので、まずは手触りや印象を思い出すことを通して、二次的に再現する必要があるということ。

③ 書かれるべき出来事は、あらかじめ客観的に存在するのではなく、書くプロセスのなかで、その手触りや印象も含めて、おのずと構成されていくということ。

④ 書かれるべき出来事は、実際に経験したことを思い出しながら書いていくのだが、構成の仕方によっては、いくつものレイヤーに分かれる可能性があるということ。

問三　傍線部③「『誰でもないもの』の想起」を説明したものとして、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 15

① 特定の人に経験された出来事ではないが、小説やSFのように、事実にフィクションを加えることで、一人称複数の経験であるかのように思い出すこと。

② 不特定の誰かによって経験された出来事ではあるが、ある共同体における事実をベースにすることで、一人称を超えた集合的レベルで思い出すこと。

③ 特定の人に経験された出来事ではないが、すぐれた小説や映画がそうであるように、あたかも自分が経験した出来事であるかのように思い出すこと。

④ 不特定の誰かによって経験された出来事ではあるが、社会的に開かれた創作技法を通して、事実をノンフィクションであるかのように思い出すこと。

問四　空欄 X を補うのに最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 16

① あるフィクションのもとになった実体験

② ある実体験をもとに立ち上げたノンフィクション

③ あるノンフィクションのもとになった実体験

④ ある実体験をもとに立ち上げたフィクション

問五　傍線部④「何よりも『書きかた』が重要になります」とありますが、その理由として、明らかにふさわしくないものを一つ選びなさい。

解答番号 17

① 書きかたを工夫しなければ、どんなに切実な経験であっても、創作やフィクションとみなされてしまうから。

② 書きかたがまずければ、書いたものが誤読されたり歪曲されたりして、出来事の記憶が損なわれてしまうから。

③ 書きかたがまずければ、膨大な量のテキストに流され、忘れてはいけないことが失われてしまうから。

④ 書きかたを工夫しなければ、その出来事がもっていた手触りや感触などが失われてしまうから。

問六　空欄 A と B を補うのに最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。

解答番号 18

① A 安易　B 結末

② A 陳腐　B 強度

③ A 平明　B 価値

④ A 空疎　B 能力

問七　傍線部⑤「このエッセイの見えかたが大きく変わってくる」を説明したものとして、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 19

① 「シベリア・エッセイ」は、社会集団の記憶として尊重される記録ではあるが、そもそもは石原吉郎が個人的に経験したことを想起して書いたものに過ぎないということ。

② 「シベリア・エッセイ」は、過酷な戦争体験の記録として、戦後日本の文芸史に名を刻んでいるが、石原吉郎が経験したことを個人的に綴ったエッセイに過ぎないということ。

③ 「シベリア・エッセイ」は、石原吉郎が個人的に経験したことを想起したものに過ぎないが、硬質な文体で書かれた結果、歴史的に読み継がれる記念碑になったということ。

④ 「シベリア・エッセイ」は、石原吉郎が個人的に経験したことを、詩ではなくエッセイとして書いたがゆえに、日本の文芸史のなかに不動の地位を確立することができたということ。

問八　傍線部⑥「現状のフローをただ強化するだけの文章」とありますが、その中に明らかに含まれないものを一つ選びなさい。

解答番号 20

① 多くの人に興味のある情報を、なるべく早く伝えるために書かれた文章。

② 個人にとって忘れたくない経験が、多くの人に記憶されるように書かれた文章。

③ 拙速ではあっても、多くの人に必要な情報を広く伝えるために書かれた文章。

④ ある人の経験した切実な出来事が、より多くの人に役立つように書かれた文章。

〔二〕　左の文章は、冒頭の和歌「思ひかね別れし野べをきてみれば浅茅が原に秋風ぞふく」について、その解釈を述べたものです。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

思ひかね別れし野べをきてみれば浅茅が原に秋風ぞふく

これは、楊貴妃がことを詠めるなり。楊貴妃といへるは、昔、もろこしに、玄宗と申すみかどおはしけり。もとより色をなむ好み給ひける。いみじうあひし給ひける女御、后なむおはしける。后をば源憲皇后といひ、女御をば武淑妃となむ聞こえける。いみじうあひ思しけるほどに、とりつづき二人ながら亡せ給ひにけり。①それ、思しめし嘆きて、これらに似たる人やあると求め給ふほどに、やうやう、楊元琰といへる人の娘ありけり。容姿、世にすぐれて、めでたくなむおはしける。（中略）三千人の寵愛、一人なむおはしけるを、もてあそび給ひけるほどに、世の中の政治をもし給はず。（中略）

②世の中なむ騒ぎけるを聞きて、世人の心に従ひて、安禄山といふ人、いかでみかどをあやぶめたてまつりて、この女御を殺さむと思ふ心ありけり。（中略）安禄山、賜はりて、みかどの御前にして、殺してけり。みかど、これを御覧じて、肝心まどひて、涙よもに流れて、見給ふにたへずぞありける。かくて、都に帰り給ひて、位をば東宮にゆづり給ひにけり。（中略）思し嘆くを聞きて、③まぼろしといへる道士の参じて申さく、「我がみかどの御使として、この女御のおはし所をたづね侍らむ」と申しければ、みかど大きに喜びてのたまはく、「しからば、我がためにこの人のあり所をたづねて聞かせよ」とのたまふ。このみことのりを承りて、上は大空をきはめ、下はそこ根の国まで求めけれど、つひにえたづね得ずなりにけり。ある人のいはく、「ひんがしの海に蓬萊といふ島あり。その島の上に、大きなる宮殿あり。そこになむ、玉妃の大真院といふ所あり。それになむおはする」といひければ、たづねていたりにけり。

その時に、山の端に日やうやういたりて、海のおもてくらがりゆく。花の扉もみなたてて、人の音もせざりければ、この戸をたたきけり。青き衣着たる乙女の鬢づら上げたる出で来たりていはく、「汝は、いかなる所より来たれる人ぞ」。まぼろし、答へていはく、「みかどの御使なり。申すべきことのあるにより、かくはるかにたづね来たれるなり」。この乙女のいはく、「玉妃、

まさに寝 A 。ねがはくはしばらく待ち給へ」。その時まぼろし、手を手向けてゐたり。

夜明けて、このまぼろしを召し寄せて玉妃のたまはく、「帝王は、平かにおはしますやいなや。次には、天宝十四年よりこのかた、今日に至るまでいかなることかある」。まぼろし、その間のことを語り申しけり。帰りなむとしける時にのぞみて、玉のかんざしをなむ、摘み折りて賜はせける。「これを持ちて、みかどにたてまつれ。昔のこと、これにて思し出でよ」となむ申し給ひける。まぼろし申さく、「④玉のかんざしは世にある物なり。これをたてまつらむに、我が君まことと思し召さじ。ただ、昔、君と忍びて語らひ給ひけむことの人に知られぬ侍りけむ。それを申し給へ。さてなむ、まこととは思し召すべき」と申しければ、楊貴妃、しばらく思しめぐらしてのたまはく、「われ、昔七月七日に七夕あひ見し夕に、⑤みかど、われに立ちそひてのたまはることは、たなばた、ひこほしの契りあはれなり。われもかくあらむと思ふ。もし天にあらば、翼をならべる鳥とならむ。地にあらば、ねがはくは枝をかはしたる木とならむ。天も長く、地も久しく、終はることあらば、この怨みは綿々として絶ゆる期なからむと申せ」と語らひ給ひける。帰りてこの由を奏しければ、みかど、大きに悲しび給ひて、つひに悲しびに堪へずして、幾程もなくて亡せ給ひにけりとぞ。

その楊貴妃が殺されける所へ、おはしまして御覧じければ、野べに浅茅、風に波よりて、あはれなりけむと、かのみかどの御心のうちをおしはかりて詠める歌なり。

（源俊頼『俊頼髄脳』による）

（注）○浅茅が原＝チガヤが生えた野原。荒野を指すことが多い。○もろこし＝中国。ここでは、唐王朝を指す。○玄宗＝唐の第六代皇帝。○道士＝道教（中国で成立した宗教の一種）の修行につとめ、儀礼を行う専門家。○そこ根の国＝底の国、根の国。死者が行くとされる地下の世界。○蓬萊＝東方海上にある仙人の住む島を指す。○玉妃＝ここでは楊貴妃のこと。○鬢づら＝顔の横、耳のそばの髪。○手を手向けて＝手を合わせて。○天宝十四年＝天宝は唐の年号。安禄山の反乱が起きた年を指す。○綿々＝長く続いて途絶えないさま。

問一　傍線部①「それ」の指し示す具体的な内容として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 21

① 玄宗が女性を好んだこと
② 玄宗には女御のほかに后がいたこと
③ 女御と后が相次いで死んだこと
④ 玄宗その人のこと

問二　傍線部②「世の中なむ騒ぎける」とありますが、「世の中」は何について騒いでいるのですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 22

① 玄宗が女御、后の死後、楊元琰の娘を迎えたこと。
② 玄宗が迎えた楊元琰の娘がとても美しかったこと。
③ 楊元琰の娘が三千人もの人から愛される存在だったこと。
④ 玄宗が楊元琰の娘を愛し、政治を行うのを怠ったこと。

問三　傍線部③「まぼろしといへる道士」は楊貴妃を探す旅に出ましたが、その居場所を見つけ出すまでの経緯の説明として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 23

① 大空の上から地下の世界まで探したがわからず、ある人に、東の海にある蓬萊という島の上に大きな宮殿と玉妃の大真院が並んでいると言われた。訪ねると、玉妃の大真院にいた。
② 大空の上から地下の世界まで探したがわからず、ある人に、東の海にある蓬萊という島の上に大きな宮殿があり、その中の玉妃の大真院というところにいると言われた。訪ねると、そこにいた。
③ 大空の上から地下の世界まで探す途中で、道に迷って、ある人に、東の海にある蓬萊という島の上に大きな宮殿があり、中に玉妃の大真院というところがあるから行けと言われた。行くと、そこにいた。
④ 大空の上から地下の世界まで探す途中で、道に迷って、ある人に、東の海にある蓬萊という島に行けと言われた。行って大きな宮殿を見つけ、訪ねると、その中の玉妃の大真院というところにいた。

問四　空欄 A を補うのに、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 24

① 給はじ　② 給はばや　③ 給へり　④ 給ふや

問五　傍線部④「玉のかんざしは世にある物なり」とありますが、まぼろしは玉のかんざしをどのようなものだと考えているのですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 25

① ふつうの人間の世界にもあるもので、玄宗に渡しても楊貴妃に会った証拠にはならないもの。
② 蓬萊だからこそあるものだが、玄宗が楊貴妃から今もらいたいと思うとは考えられないもの。
③ どこにでもあるもので、玄宗がわざわざ楊貴妃からもらう価値があるものとは見えないもの。
④ 蓬萊にしかないものではあるが、玄宗はおそらくこれを見ても本物の玉だとは思わないもの。

問六　傍線部⑤「みかど、われに立ちそひてのたまはること」とありますが、玄宗が楊貴妃だけに語った言葉のはじめは、傍線部のあとの「たなばた」です。そのおわりは、二重傍線部ア～エのうち、どれですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 26

① ア　契りあはれなり
② イ　かくあらむと思ふ
③ ウ　木とならむ
④ エ　絶ゆる期なからむ

問七　この文章全体の内容をふまえて、冒頭の和歌「思ひかね別れし野べをきてみれば浅茅が原に秋風ぞふく」の解釈として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 27

① 思いを抑えきれず、玄宗が楊貴妃と死に別れたと聞く野原に私が実際に来てみると、チガヤの生えた荒野で秋風が吹いている音を聞いて、私は寂しい思いになった。

② 思いを抑えきれず、楊貴妃と死に別れた野原に玄宗が来てみたら、チガヤの生えた荒野で秋風が吹き、ますます寂しい思いがしたことであろうと、私は想像する。

③ 思いを抑えきれず、楊貴妃と死に別れた野原に玄宗が来てみたら、チガヤの生えた荒野で秋風が吹いていて、ますます寂しい思いがしたそうだと、私は聞いている。

④ 思いを抑えきれず、玄宗が楊貴妃と死に別れたと聞く野原に私が実際に来てみると、チガヤの生えた荒野で秋風が吹いていたので、玄宗はますます寂しい思いがしただろうと、私は思った。

問八　『俊頼髄脳』は平安時代末期に成立した歌論書ですが、同じジャンルの作品として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 28

① 『古来風体抄』　② 『風姿花伝』　③ 『十訓抄』　④ 『菟玖波集』